

千葉県八千代市

# 川崎山遺跡 n 地点発掘調査報告書

—宅地開発事業に先行する埋蔵文化財発掘調査—

2008

二十一大成住販株式会社  
八千代市教育委員会



## 凡　例

- 1 本書は、八千代市菅田字中台2288-3に所在する川崎山遺跡n地点の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、確認調査、本調査とも八千代市教育委員会の直営事業として実施した。
- 3 発掘調査・本整理作業は以下のとおり実施した。

### 確認調査

期　間 平成19年4月20日～4月27日  
面　積 126m<sup>2</sup>/1,178.78m<sup>2</sup>  
担　当 森 竜哉

### 本調査

期　間 平成19年6月6日～7月31日  
面　積 305m<sup>2</sup>  
担　当 森 竜哉

### 本整理

期　間 平成20年3月3日～3月25日  
担　当 森 竜哉

- 4 本書の編集は森が、執筆は、遺物観察表の弥生土器については中野修秀が、それ以外は森がおこなった。
- 5 現場の遺構、遺物及び報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。
- 6 本書の作成・刊行については、下記の整理補助員と森が協力して行い、森が統括した。  
池田瞳 野中訓子 原本拓矢 山下千代子
- 7 出土遺物、実測図等の資料は、八千代市教育委員会が保管している。
- 8 本書の遺構番号は、発掘調査時の番号を使用している。
- 9 遺構・遺物の縮尺及びスクリーントーンの説明は個々の挿図に記載した。
- 10 本書使用の地形図等は、下記のとおりである。  
第1図 八千代市発行 1/25,000八千代都市計画基本図  
第2図 八千代市発行 1/2,500八千代都市計画基本図
- 11 発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導、ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略)  
二十一大成住販株式会社 千葉県教育庁文化財課

## 本文目次

### 凡例

#### 第1章 序説

第1節 調査に至る経緯	2
第2節 調査の方法と経過	2
第3節 遺跡の位置と環境	2

#### 第2章 検出された遺構と遺物

第1節 弥生時代後期	5
第2節 古墳時代中期	9
第3節 遺構外出土遺物	14
第3章 まとめ	16

## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡	1
第2図 川崎山遺跡各地点位置図	4
第3図 川崎山遺跡n地点遺構配置図	5
第4図 01D住居跡平面図（1）	6
第5図 01D住居跡平面図（2）・出土遺物（1）	7
第6図 01D住居跡出土遺物（2）	8
第7図 03D住居跡平面図	9
第8図 02D住居跡平面図・出土遺物	10
第9図 04D住居跡平面図	12
第10図 04D住居跡出土遺物	13
第11図 01P平面図	14
第12図 遺構外出土遺物	15

## 表目次

01D・02D・04D・遺構外出土遺物観察表	17
------------------------	----

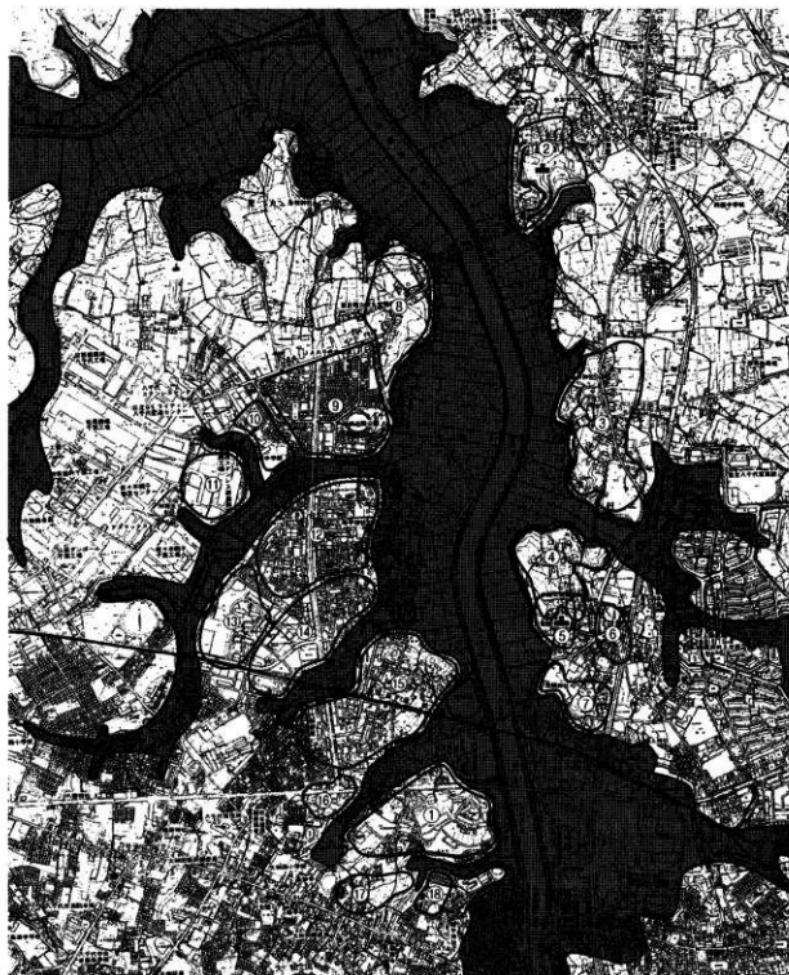
## 写真図版

図版1～3 遺構

図版4～6 遺物

報告書抄録

## 第1章 序説



第1図 川崎山遺跡周辺の遺跡 (S = 1 : 25,000)

- |           |         |          |         |          |
|-----------|---------|----------|---------|----------|
| ① 川崎山遺跡   | ② 米木城跡  | ③ 村上宮内遺跡 | ④ 持田遺跡  | ⑤ 正覺院館跡  |
| ⑥ 殿内遺跡    | ⑦ 浅間内遺跡 | ⑧ 菖地ノ台遺跡 | ⑨ 権現後遺跡 | ⑩ ラサル山遺跡 |
| ⑪ ラサル山南遺跡 | ⑫ 北海道遺跡 | ⑬ 坊山遺跡   | ⑭ 井戸向遺跡 | ⑮ 白幡前遺跡  |
| ⑯ 池の台遺跡   | ⑰ 北裏畠遺跡 | ⑯ 上の山遺跡  |         |          |

## 第1節 調査に至る経緯

平成19年3月27日、八千代市黄田字中台2288-3の土地について株式会社二十一大成住販 代表取締役内藤 雅夫氏（以下、「事業者」という）から戸建売住宅建設の計画に伴い、「埋蔵文化財の取扱いについて」の確認依頼文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。確認地は市道跡No.241 川崎山遺跡の範囲内であり、南隣接地の発掘調査において弥生時代後期、古墳時代中期、平安時代の堅穴住居跡が検出されており、当該地に遺構が広がる可能性が高いと判断された。結果として遺跡が所在する旨回答した。その後、取扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初の計画を進める旨を確認し、発掘調査を予定することになった。平成19年4月、文化財保護法第93条第1項の規定による土木工事の発掘届が提出され、同年4月後半確認調査に着手した。

確認調査は、市教委が平成19年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫・県費補助金を受けて実施した。その結果、縄文時代の土坑1基、弥生時代後期・古墳時代中期の堅穴住居跡各1軒を検出した。この結果を踏まえ、305mについて本調査が必要な旨事業者に送付した。

その後、事業者と市教委との協議により、工事による掘削が本調査範囲に及ぶため現状保存は困難と判断されたため、記録保存の措置として本調査を実施することになった。調査は八千代市、市教委、事業者の三者による協定後、市教委による直営事業として実施することになった。八千代市と事業者による委託契約が締結され、諸準備が整った平成19年6月、調査に着手した。

## 第2節 調査の方法と経過

確認調査の成果から、表土下がソフトロームという基本層序であり、縄文土器等の包含層は存在しないことは明らかであった。確認面はソフトローム上面とした。

基本的に遺構内出土の遺物については、座標上の平面位置と水準点に基づく高さを記録し、取り上げていった。随時出土状況の写真により記録資料として補足した。

調査は、平成19年6月6日から7月31日の期間で行った。表土等の排土は場内の調査区外に積み上げた。経過は6月6日から11日重機による表土除去、6月8日から15日01D・02D・03D・04D遺構プラン精査、6月18日から7月29日04D遺構掘り下げ・炭化物検出・実測等調査、6月25日から7月3日02D・03D遺構調査、6月26日から7月19日01P遺構調査、7月3日から28日01D遺構掘り下げ・実測等調査、7月30、31日埋め戻しにより調査を終了した。

## 第3節 遺跡の位置と環境

本遺跡は平成20年3月現在、14地点の発掘調査が実施されている<sup>(1)</sup>。詳細は(1)文献に譲るが、概観すると台地北側から東・南側の縁辺部においては、弥生時代後期・古墳時代前・中期の集落が継続して営まれる。古墳時代後期から奈良時代に居住の断絶が見られ、平安時代に集落が細々と展開している。台地西側縁辺部においては、縄文時代中期阿玉台式期に集落が営まれる。b地点では中期前半の包含層が検出された。台地中央から縁辺部においては、縄文時代の陥穴（落し穴）が展開している状況である。

川崎山遺跡周辺の遺跡について、新川を挟んだ黄田地区・村上地区を概観していくこととする。

新川東岸の米本地区では、(2)米本城跡が三郭からなる直線連郭式の城である。城に関連するりゅうげ、根古屋の地名も残り、周辺同台地上の下宿東遺跡では中世の土坑が検出された。城の領域を考慮すべき遺構である。

村上地区では、(3)から(7)が掲げられる。(3)村上宮内遺跡では確認調査のみの知見であるが、平成12年度の調査で、古墳時代前期の堅穴住居跡が11軒検出された。(4)持田遺跡では平成5年度の本調査に

おいて古墳時代後期の堅穴住居跡 12 軒、正覚院館跡関連の堀 1 条が検出された。⑤正覚院館跡は前述の調査を含む 2 回の調査において、二郭の防御部分と一段低い館部分によって構成されることが判明している。⑥殿内遺跡では昭和 60 年から平成 17 年の 3 地点の調査において、古墳時代前期の堅穴住居跡 1 軒、奈良・平安時代の堅穴住居跡 50 軒以上が検出されている。⑦浅間内遺跡は縄文時代から中世に亘る複合遺跡である。縄文時代では堅穴住居跡 2 軒、陥穴 24 基、土坑 154 基で時期はほぼ中期阿玉台式と想定されている。弥生時代では後期の堅穴住居跡 19 軒、古墳時代では前期から中期後半の堅穴住居跡 31 軒、前期古墳 1 基、円形土坑 22 基が、奈良・平安時代では、堅穴住居跡 64 軒が、他に中世の地下式坑・火葬墓・土坑等が検出された。

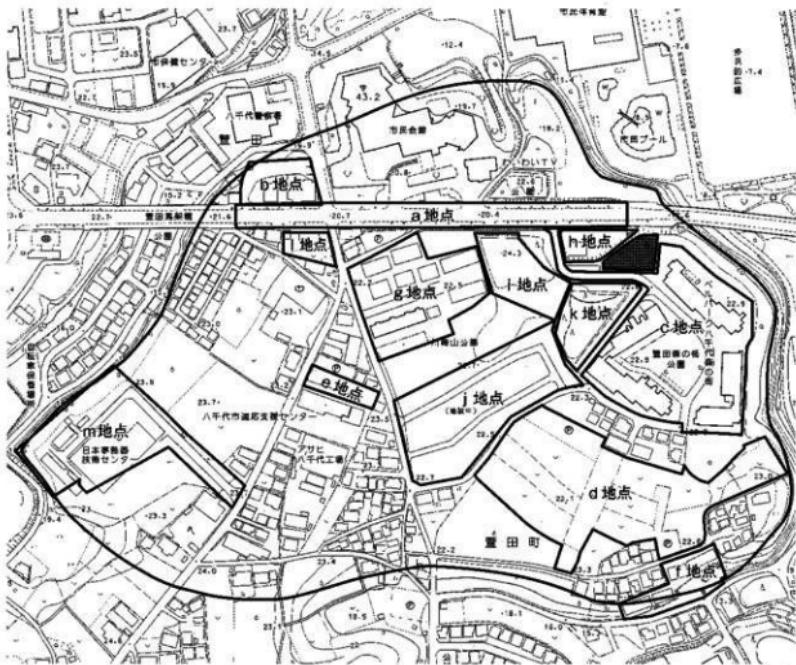
萱田地区では、⑧から⑯が掲げられる。⑧普地ノ台遺跡では、弥生時代後期堅穴住居跡 5 軒、古墳時代前期から中期の堅穴住居跡 8 軒、奈良・平安時代堅穴住居跡 26 軒が検出された。⑨、⑩、⑫から⑯は(財)千葉県文化財センターによる発掘調査で、ローム層中の旧石器時代文化の様相がより明確となった遺跡である。⑨権現後遺跡では旧石器時代遺物集中地点 27 カ所、弥生時代後期堅穴住居跡 73 軒、古墳時代前期同跡 32 軒・中期 5 軒・後期 10 軒、奈良・平安時代同跡 68 軒が検出された。⑩ヲサル山遺跡は旧石器時代遺物集中地点 29 カ所、縄文時代早期炉穴 19 基・中期から後期堅穴住居跡 5 軒、弥生時代終末期から古墳時代初頭堅穴住居跡 34 軒、奈良・平安時代堅穴住居跡 2 軒で奈良・平安時代の割合が少ない。⑪ヲサル山南遺跡は八千代市教育委員会、八千代市遺跡調査会により 2 地点で調査が実施された。成果は縄文時代中期堅穴住居跡 8 軒、堅穴状造構 1 基、土坑 7 基、奈良・平安時代堅穴住居跡 4 軒が検出された。⑫北海道遺跡では、旧石器時代ブロック 63 カ所、堅穴住居跡が弥生時代後期 73 軒、古墳時代中期 22 軒、同後期 7 軒、奈良・平安時代 114 軒と縦続性が伺える。⑬坊山遺跡では、旧石器時代ブロック 34 カ所、縄文時代堅穴住居跡(中期か) 1 軒が検出された。⑭井戸向遺跡は旧石器時代ブロック 34 カ所、堅穴住居跡が弥生時代後期 6 軒、古墳時代前期 31 軒、奈良・平安時代 95 軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡 44 棟が検出された。⑮白幡前遺跡では、旧石器時代ブロック 56 カ所、堅穴住居跡が弥生時代後期 17 軒、古墳時代後期 5 軒、奈良・平安時代 279 軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡 150 棟と井戸向遺跡同様奈良・平安時代にムラとして成熟し、掘立柱建物が多く建てられている。

萱田町地区では、⑯から⑯が掲げられる。⑯池の台遺跡は昭和 54 年から平成 16 年にわたる 6 地点の調査において、縄文時代の土坑 1 基、早期撚糸式・中期阿玉台式土器片や平安時代堅穴住居跡 6 軒、同時代土坑 2 基等が検出された。⑰北裏畠遺跡では平成 12 年・17 年の 2 地点の調査で、縄文時代陥穴 1 基、近世の土坑 3 基、近世以降の遺物が出土している。⑱上の山遺跡は、隣接する 3 地点の調査において弥生時代後期の堅穴住居跡が 5 軒検出されている。

(1) 2008 八千代市教育委員会『川崎山遺跡 m 地点発掘調査報告書』 p10

## 参考文献

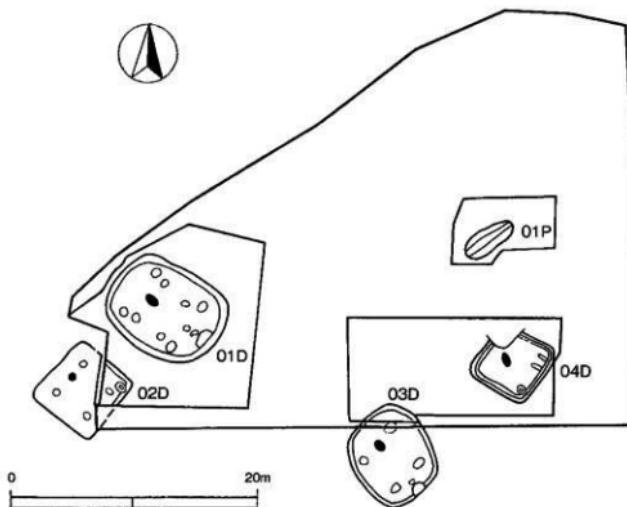
- ②木本城跡 1976 八千代市教育委員会・八千代市中世城址調査会『八千代市中世城址調査報告』
- ③村上宮内遺跡 1. 1987 八千代市教育委員会『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告集』  
2. 2002 八千代市教育委員会『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成 13 年度』
- ④持田遺跡 1997 八千代市教育委員会『平成 6 年度八千代市埋蔵文化財調査年報』
- ⑤正覚院館跡 2000 (財)千葉県文化財センター『研究紀要 20 中世城館跡の構造と特質』
- ⑥殿内遺跡 2007 八千代市教育委員会『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成 18 年度』
- ⑦浅間内遺跡 1. 2003 八千代市教育委員会『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成 14 年度』  
2. 2007 八千代市教育委員会『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成 18 年度』



第2図 川崎山遺跡各地点位置図 (S = 1 : 4,000)

■ 今回調査区

- ⑥青地ノ台遺跡 2004 八千代市教育委員会「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度」
- ⑦撫現後遺跡 1. 1984 (財)千葉県文化財センター「八千代市撫現後遺跡」  
2. 1994 (財)千葉県文化財センター「八千代市撫現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡」  
3. 2007 八千代市教育委員会「千葉県八千代市撫現後遺跡」
- ⑧ヲサル山遺跡 1986 (財)千葉県文化財センター「八千代市ヲサル山遺跡」
- ⑨ヲサル山南遺跡 2008 八千代市教育委員会「千葉県八千代市連水遺跡f地点 北安瀬遺跡b地点 高津新田遺跡c地点 西山遺跡b地点 西山遺跡c地点 内野遺跡b地点 役山遺跡a地点 川崎山遺跡k地点 ヲサル山遺跡b地点」
- ⑩北海道遺跡 1985 (財)千葉県文化財センター「八千代市北海道遺跡」
- ⑪坊山遺跡 1993 (財)千葉県文化財センター「八千代市坊山遺跡」
- ⑫井戸向遺跡 1987 (財)千葉県文化財センター「八千代市井戸向遺跡」
- ⑬白幡前遺跡 1991 (財)千葉県文化財センター「八千代市白幡前遺跡」
- ⑭池の台遺跡 2005 八千代市教育委員会「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度」
- ⑮北裏塙遺跡 ⑪に同じ
- ⑯上ノ山遺跡 2008 八千代市道路調査会「千葉県八千代市上ノ山遺跡」



第3図 川崎山遺跡n地点遺構配置図 (S = 1 : 400)

## 第2章 検出された遺構と遺物

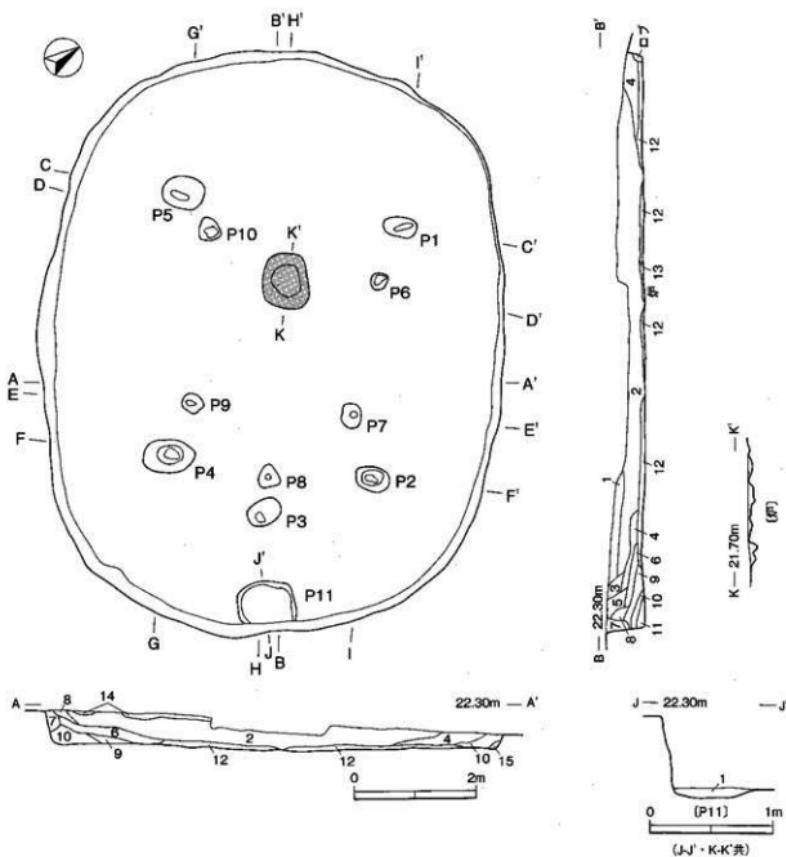
今回の調査では、時期不詳（縄文時代か）の陥穴が1基、弥生時代後期竪穴住居跡2軒、古墳時代中期竪穴住居跡2軒が検出された。隣接、周辺の調査事例と類似するもので、川崎山遺跡北側縁辺から中央部の資料を蓄積することができた。

### 第1節 弥生時代後期

遺構は、大型の竪穴住居跡01D住居跡とc地点本調査時の範囲外として検出された03D住居跡の2軒である。なお、c地点調査時の遺構番号は第42号住居跡である。

#### 01D住居跡（第4.5.6図 図版1）

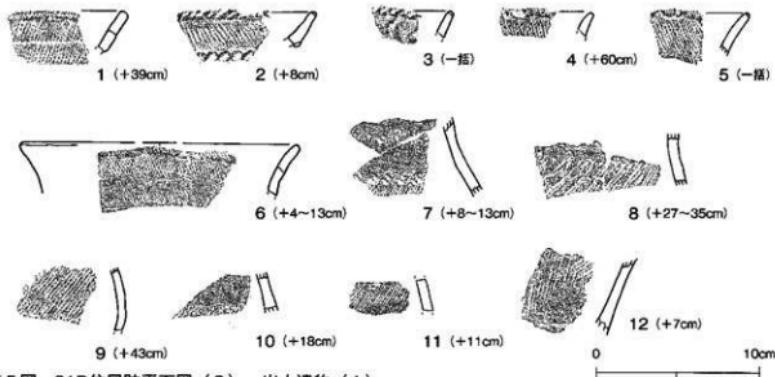
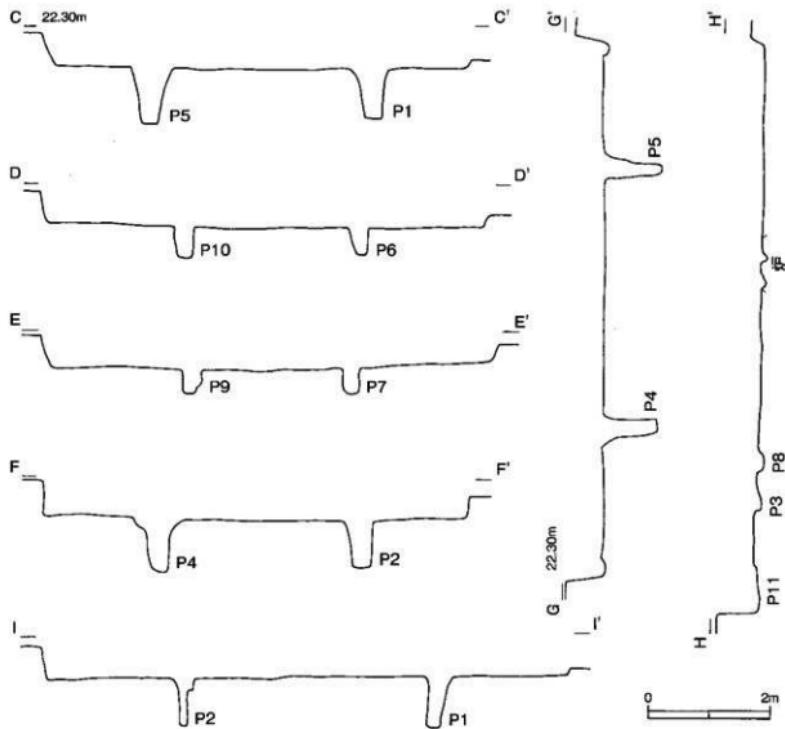
方位は、炉を奥とした長軸でN 46° - Wと北西方向に傾いている。規模は、長軸9.6m × 短軸7.7mで平面形は長楕円形である。確認面はソフトローム層上位の暗褐色土中で、床面はハードロームを15cm程度掘り込んでいる。壁高はB - B'間のB側で60cm、B'側で30cm・A - A'間のA側で55cm、A'側で25cmと北壁から東壁側で浅い。自然面の傾斜が北東方向で深かったためと考えられる。床面はハードローム中で、全体に強く踏み締められるが、P1、P4、P5の壁際でやや軟弱である。掘り方は床面までの粗掘り後に、部分的に埋め戻して平垣面としている。炉は、92cm × 75cmの楕円形で深さ4～5cmの部分も見られるが、底面の掘り込みは明確ではない。床面上の地床炉と想定されよう。使用面はハードロームが赤色化し使い込まれている。覆土は13層である。ピットは、P1～P5のグループ、P6～P10のグループとP3南壁際のP11が検出された。P1～P5は深さ70cm～90cm・P3のみ10cmで平面は楕円形を呈する。P6～P10は深さ35cm～40cm・P8のみ10cmで円形を呈する。P11は、95cm × 70cmの長方形で深さ9cmと浅い掘り込みである。住居跡覆土は、黒色土・暗褐色土



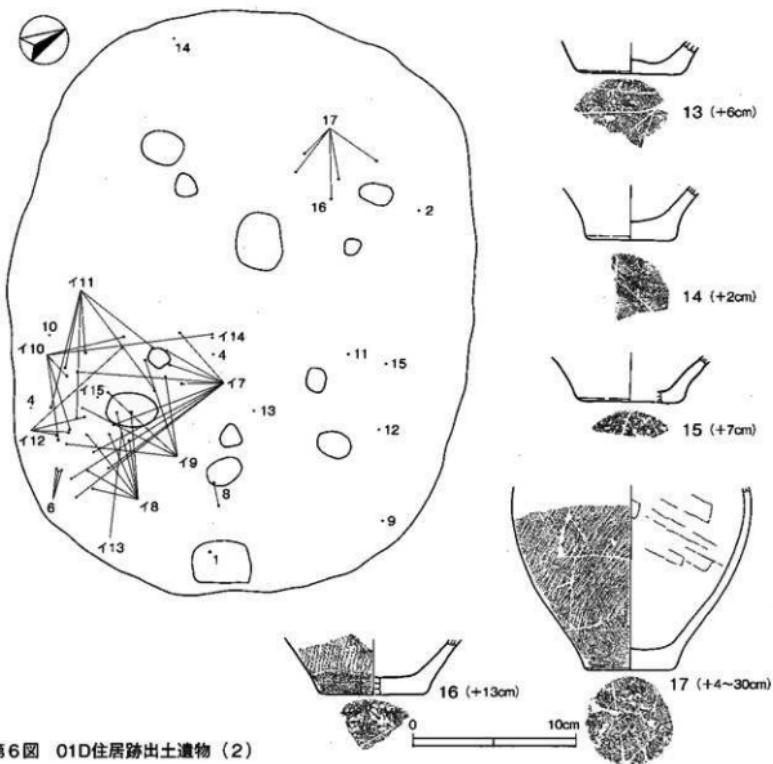
#### O1D 土層説明

1. 黒褐色土 2 mm大ローム粒子、ローム粒混入。粘性、しまりあり。
  2. 黒褐色土 1 mm大ローム粒子混入。ローム粒ごく少量混入。
  3. 黒褐色土 ローム、黒色土混合層。1 mm大ローム粒子混入。粘性、しまりあり。
  4. 黒褐色土 3層混入。ローム粒や多い。
  5. 黒褐色土 3層混入。4層よりローム粒や多い。
  6. 明褐色土 ローム粒に暗褐色土混入。しまりあり。
  7. 深褐色土 ローム土。
  8. 明褐色土 6層混入。ロームブロック混入。
  9. 暗褐色土 1~2 mm大ローム粒子混入。粘性、しまりあり。
  10. 暗褐色土 9層混入。黑色土混入多い。
  11. 暗褐色土 ローム粒、黒色土混合。粘性、しまりあり。
  12. 梅色土 ローム粒主に、暗褐色土混入。しまっている。
  13. 黑褐色土 黒色土中に2~3 mm大焼土ブロック混入。
  14. 梅色土 暗褐色土上に、黒色土ごく少混合。
  15. 暗褐色土 ローム土に、黒色土ごく少混合。
- O1D P11 土層説明
1. 喀褐色土 ローム、黒色土混合層。粘性あり、しまる。

第4図 O1D住居跡平面図(1)



第5図 01D住居跡平面図(2)・出土遺物(1)



第6図 01D住居跡出土遺物（2）

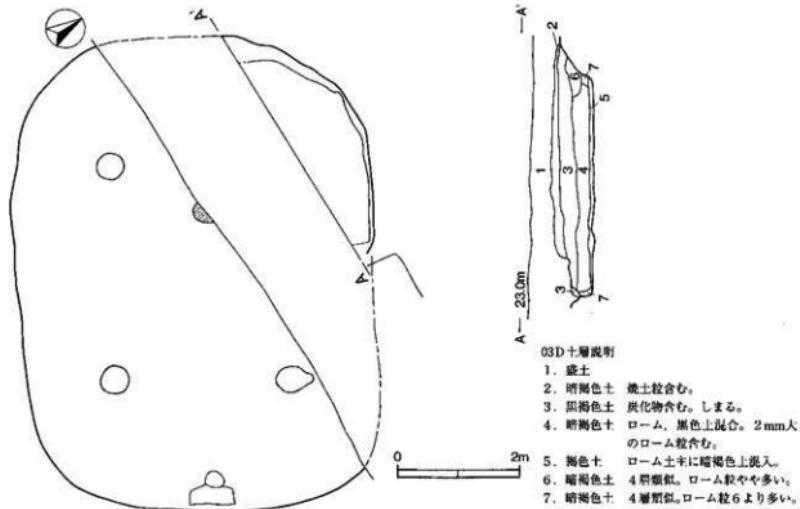
の自然埋没状況を示す。ピットの配列からは、覆土の状況から拡張と想定される。遺物は230点を取り上げた。内80点程度は古墳時代中期の遺物で、確認面やや下の西壁側から廃棄された状態で出土している。埋没過程を伺わせる資料である。

#### 03 D住居跡（第7図 図版1）

前述したように、本遺構はc地点発掘調査時において3/5程度を調査済みであり、今回その残り部分の住居コーナーを検出した。前回・今回の緩衝部分があり想定での合成図面ではあるが、規模を明らかにできた。方位は、炉を奥とした長軸でN-72°-Wと西方向に大きく傾いている。規模は、長軸7.8m×短軸5.8mで平面形は長楕円形である。確認面はソフトローム層上面で、壁高は70cmと深い。床面はハードローム上で、全体に強く踏み締められる。覆土は暗褐色土の自然埋没層である。遺物は4点取り上げたが、小片であり図示できなかった。なお、本遺構の概要は以下の文献を参照されたい。

八千代市川崎山遺跡調査会 1999 「千葉県八千代市川崎山遺跡」－埋蔵文化財発掘調査報告書－

P76～P79 第42号住居跡の項



第7図 03D住居跡平面図

## 第2節 古墳時代中期

遺構は、c 地点本調査時の範囲外として検出された 02 D 住居跡と炭化材がまとまった状態で検出された 04 D 住居跡の 2 軒である。なお、02 D 住居跡は、c 地点調査時の遺構番号が第 46 号住居跡である。

### 02 D 住居跡（第8図 図版1）

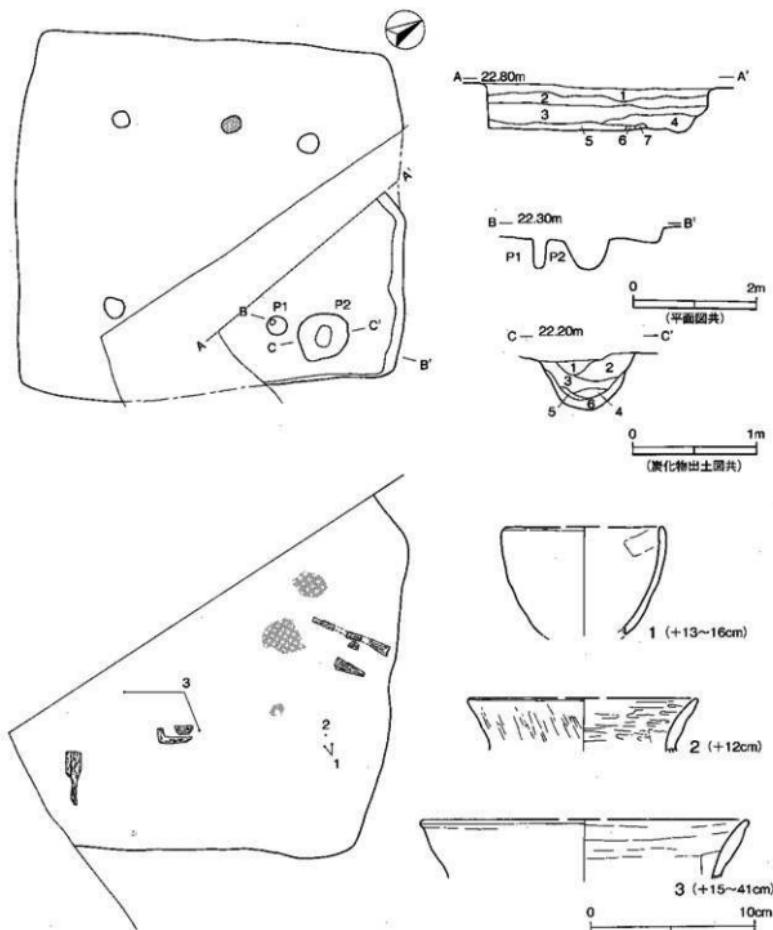
方位は、炉を奥とした主軸で W・10°・S と南西方向に傾いている。規模は、5.6 m × 5.8 m で平面形は方形である。確認面はソフトローム層上位の暗褐色土中で、床面はソフトローム中、壁高は 20cm と浅く、全体に踏み締められている。掘り方はピット断面の観察では、埋め戻して平坦面としている。ピットは、柱穴の P 1 と貯蔵穴の P 2 が検出された。P 1 は深さ 50cm の円形で、覆土は上層で暗褐色土、下層はローム土であった。P 2 は 80cm × 72cm の楕円形で深さ 46cm、底面は丸底状を呈する。覆土は、下層において焼土粒・炭化粒を含む暗褐色土である。また、床面に密着して炭化材・焼土が出土した。住居跡覆土は 3 層以下で、3・4 層が自然埋没層・5・6・7 層が焼土粒・炭化粒を含む黒色土である。埋没経過は、柱撤去後に柱穴を埋め、廃材を燃やし、P 2 は埋め戻されずに自然埋没している。住居の埋没も自然に仕された状態と考えられる。遺物は 23 点出土しているが、全体に床面から浮いた状態で、埋没段階での混入であろう。なお、本遺構の概要は以下の文献を参照されたい。

八千代市川崎山遺跡調査会 1999 『千葉県八千代市川崎山遺跡』－埋蔵文化財発掘調査報告書－

P216～P220 第46号住居跡の項

### 04 D 住居跡（第9.10図 図版2.3）

方位は、炉を奥とした主軸で N・40°・E と北東方向に傾いている。規模は、4.8 m × 4.7 m で平面形は方形である。確認面はソフトローム層上位の暗褐色土中である。壁高は B・B' 間の B 側で 52cm、B'



#### 02D 土層説明

1. 暗褐色土 表十層。
2. 暗褐色土 ローム较少量混入。
3. 黒褐色土 ローム粒斑点状に含む。粒子細かく、しまる。
4. 暗褐色土 3層複数。ローム粒の割合多い。
5. 暗褐色土 ローム、黒色土混合層。しまっている。
6. 赤褐色土 黒色土、焼土粒混入。
7. 赤褐色土 黑色土、焼土粒混合層。焼土粒の割合多い。

#### 02D P 2 上層説明

1. 暗褐色土 炭化粒、焼土粒混入。粒子細かくしまっている。
2. 暗褐色土 ローム、褐色土混合層。ロームや多い。
3. 暗褐色土 粒子細かくしまっている。
4. 赤褐色土 焼土粒中に暗褐色土混入。
5. 暗褐色土 ローム主に暗褐色土混入。
6. 褐色土 ロームブロック。

第8図 02D住居跡平面図・出土遺物

側で44cm・A・A'間のA側で55cm、A'側で54cmを測る。床面はハードローム中で、全体に強く踏み締められるが、特に炉周辺において顕著である。掘り方はハードロームを3~4cm掘り込んだ後に、部分的に埋め戻して平坦面としている。炉は、78cm×56cmの梢円形で深さ5~6cm程度掘り込まれている。使用面は中央から壁面に偏ってハードロームが赤色化しており、よく使い込まれている。付属施設は周溝・間仕切り・貯蔵穴で、周溝は幅10~15cm、深さ7cm程度で全周する。間仕切りは2カ所で周溝に直交して作られる。長さ35~45cm、幅22cm、深さ5cmである。貯蔵穴は炉から離れたコーナー部にあり、直径50cmの円形で深さ50cmを測る。覆土は上層が暗褐色土・下層が黒褐色土で、下層には焼土、炭化物の混入は見られない。本遺構は第9図下段に示したように、炭化材・焼上がり多量に床面上から出土している。樹種同定<sup>(1)</sup>から、落葉広葉樹のコナラ属クヌギ節と単子葉植物（イネ科のヨシ属やササ類、カヤツリグサ科、イグサ科）の茎部分と判断された。炭化材等の出土状況は住居の各辺に対して直交ないしコーナー部分では対角線上といった規則性が見られることから、当初火災による家屋材の焼失状況と考えた。しかしながら、以下の点から家屋解体にかかる廃材処理と想定した。

①出土遺物は、12を除いて破損品であり、家屋解体時に遺棄ないし焼却後廃棄された出土状態を示していた。生活痕跡をとどめたものではない。

②周溝・間仕切りの覆土や貯蔵穴の覆土下層には、焼土・炭化物の混入は見られなかった。火災であれば、焼失時の痕跡として覆土中にそれらが残存する可能性は高い。結果として、家屋解体後の焼却行為だと想定されよう。

③④に連なる行為であるが、住居跡覆土の観察から家屋解体後に不要材の焼却・土堤を崩して不要材に被せ、住居を魔絶し、その後は自然埋没している状況が伺える。

④結果的に残された炭化材は、部材の長さが0.7~1.1m程度であり壁材か。屋根材の不要部分と壁材を倒して焼却したと考えている。

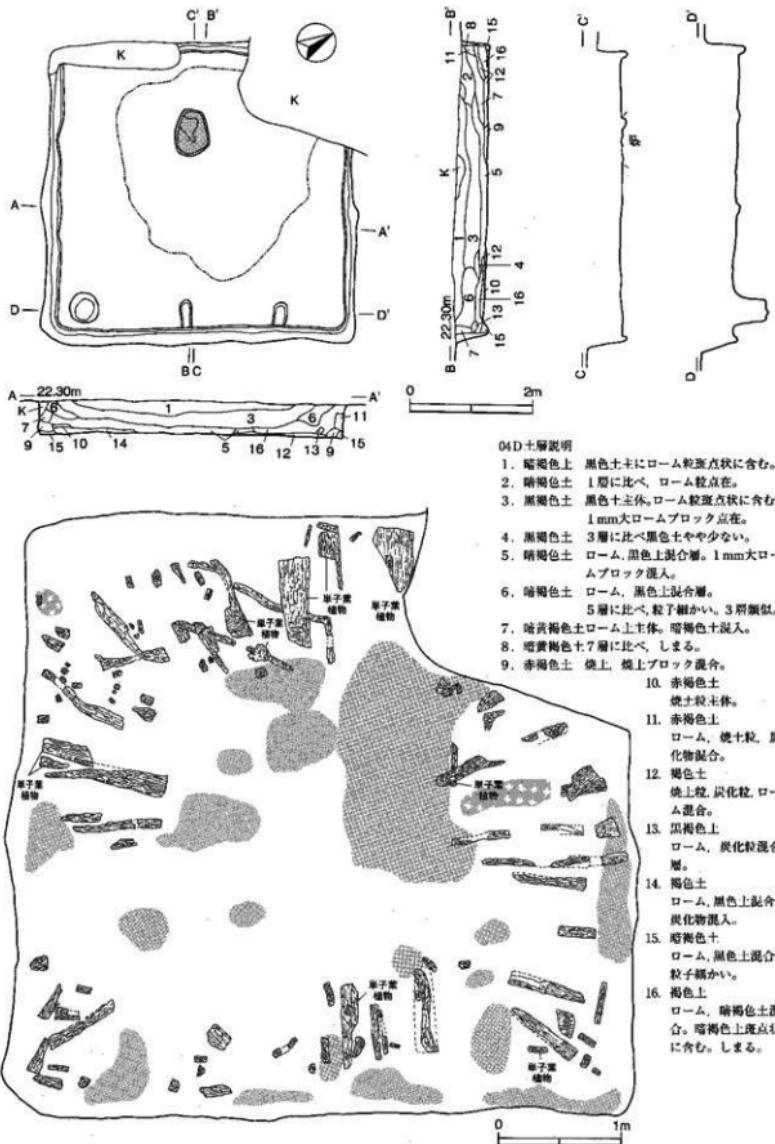
遺物は、全体で233点出土している。弥生土器の混入も少量見られるが、ほぼ遺構廃絶時の遺物と判断される。この内、家屋解体時に遺棄された遺物は焼土・炭化材下から出土している状態であり、23、6、7、10、12~14、17が該当する。他の遺物は住居廃絶時に廃棄されている。出土状況として興味深いのは、家屋解体時に遺棄された10と住居廃絶時に廃棄された18である。広範囲から破片として出土しており、住居廃絶時にかかる何らかの意図が想定される。

（1）株式会社 バレオ・ラボ 2008 平成19年度市内出土炭化材保存・分析処理委託 報告書

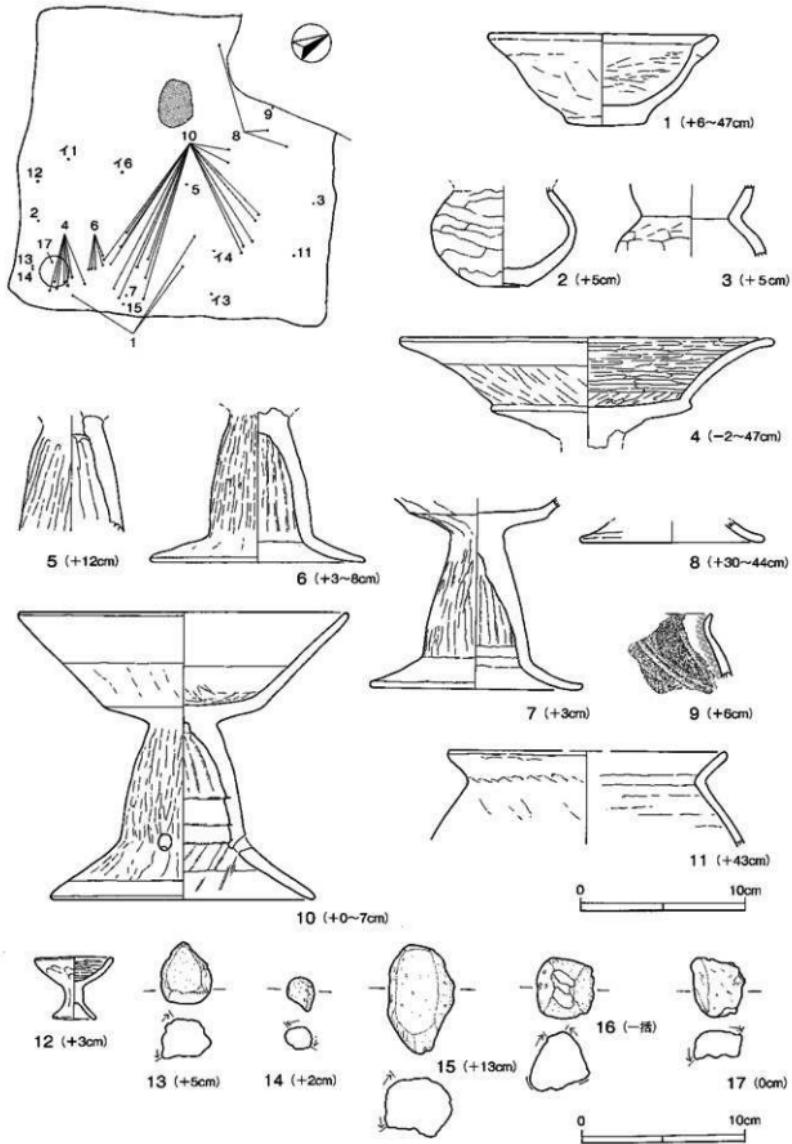
## 01 P 土坑（第11図 図版3）

開発地やや東側の平坦部で検出された。遺構北側では台地縁辺部に向けて角度変換点として、標高を減じている。川崎山遺跡での陥穴の遺構占地として見ると、過去の調査では台地縁辺部から中央平坦部に展開している状況が見られ、縁辺部での事例を加えたことになる。

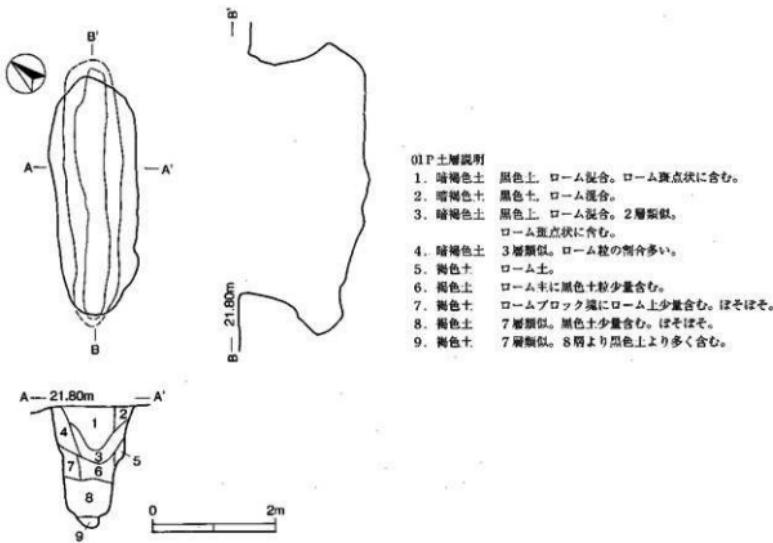
方位はN 47° - Eで東に傾いている。平面形は長梢円形で、規模は上面長軸3.9m・短軸1.4m、底面長軸4.1m・短軸0.7mで深さ2.1mを測る。確認面はソフトローム層上位の暗褐色土中で、ハードロームを1.7m掘り込んで底面としている。壁は短軸側では上面から中場まで直立で中場から底面にかけてすばまり、長軸側の中場から底面にかけてオーバーハングしている。底面の状態は長軸側で両サイドが浅く、中央で深くなっている。覆土は上層で非常に強く締まった暗褐色土で、当初自然堆積層かと考慮した位である。中～下層ではローム土のほそほそした層が主体となっている。1~4層が自然埋没層で5層以下が人為的埋め戻し層と想定される。出土遺物はなく、時期の特定はむずかしいが、覆土の締まり具合から縄文時代の所産であろうか。



第9図 04D住居跡平面図



第10図 04D住居跡出土遺物



第11図 O1P平面図

### 第3節 遺構外出土遺物

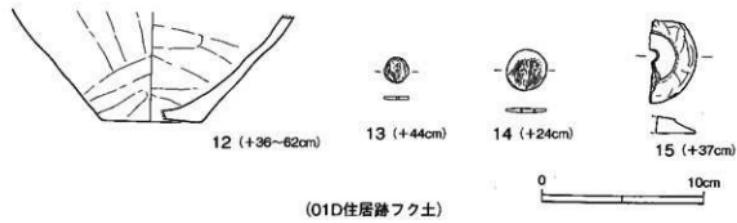
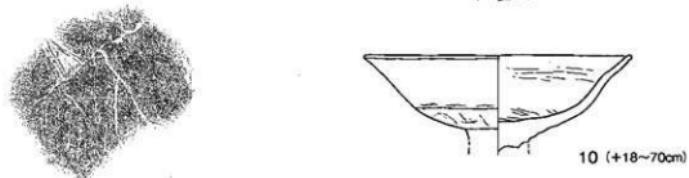
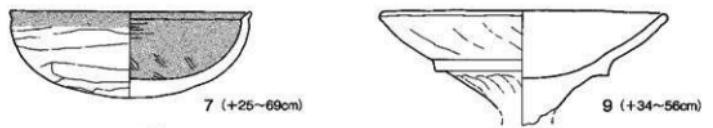
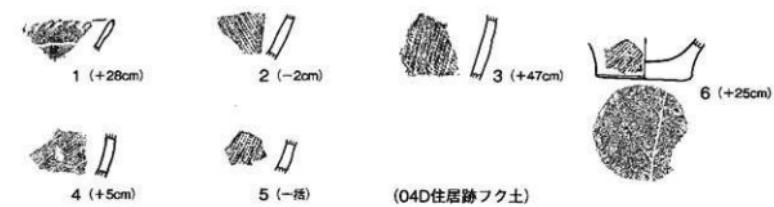
ここでは04D住居跡及び01D住居跡の覆土出土の遺物について概要を述べていくこととする。

#### 04D住居跡覆土遺物（第10図左上・12図 図版5.6）

これら図示した遺物は、古墳時代中期04D住居跡に先行しており、住居構築時・廃絶時に混入したと考えられる。出土遺物は何れも弥生時代後期の壘口縁から底部に至る破片で、他に小片が3点出土している。なお、遺物点はイ1～イ4・イ6で表示した。

#### 01D住居跡覆土遺物（第6図左・12図 図版5.6）

これらの遺物は、弥生時代後期01D住居跡の埋没段階に廃棄されたものである。01D住居跡は、前述したように、住居廃絶後に自然埋没しており、古墳時代中期段階においても埋まりきっていない状況だったことが伺える。出土位置は南壁隅に集中した平面分布を示し、確認面から少し下がった高さで出土している。



第12図 遺構外出土遺物

### 第3章 まとめ

今回の調査では、土坑1基、竪穴住居跡4軒が検出された。

01 Pは形状から竪穴で、出土遺物はないが覆土の締まり具合から縄文時代の遺構として判断した。周辺の竪穴の分布から、北側のごく浅い東西方向の小谷を北ないし東に下る導線でのケモノ道上に仕掛けられた遺構と想定される。

竪穴住居跡は01 D、03 Dの2軒が出土遺物から弥生時代後期と判断される。01 Dは前述したように柱穴の配列等から、9.6 m × 7.7 mに拡張している。拡張する以前は柱間寸法から6.5 m × 5.5 m程度の規模と想定される。当初の住居を拡張して大型化する何らかの意図が生じたと考えられる。今後、川崎山遺跡の各地点や萱田遺跡群の調査成果を踏まえて、大型住居跡の分布等を分析しその性格を明かしていくことが課題といえよう<sup>(1)</sup>。また、01 D、03 Dの時期については、両者共に付加状縄文・S字状結節文等の施文の特長から後期半ば前後の臼井南式である。高花氏編年弥生II期前に該当する<sup>(2)</sup>。

02 D、04 Dの竪穴住居跡2軒は、出土遺物から古墳時代中期と判断される。02 Dは前回調査分の遺物から球形の壺胴部・高環脚部・大型壺口辺部等の器種構成や形態から村山氏編年第II期前後が<sup>(3)</sup>。04 Dは柱状で擴部が広がる脚部を持つ高環・凹底の壺・くの字状口辺部の壺等の器種構成や形態から村山氏編年第II期に位置づけられる。遺構としては02 D、04 D共に炭化材等が出土しており、各遺構概要においても触れているが、家屋解体時にかかる行為が想定される。今後、遺物・炭化材・焼土等の出土状況や相互の関連性に着目することにより、住居の廃棄パターンが明らかになっていくことと思われる。

(1) 財團法人印旛都市文化財センター 1997 「千葉県佐倉市城次郎丸遺跡（第3次）」第3章 所見

(2) 高花 宏行 2007 「臼井南式」と周辺土器様相の検討 「印旛都市文化財センター研究紀要5」印旛都市文化財センター

(3) 村山 好文 1982 「房総における和泉式土器編年試案」『日本考古学研究所集報V』日本考古学研究所

## 01D住居跡 7.8ページ

探査番号	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	手 法 上 の 特 徴
第5回 1	甕				細砂、長石、赤色スコリア微細粒含み、微密	外面黒褐色 内面橙褐色	複合口縁。口唇上に原体江痕。口縁部に下から指痕によるキザミを残す。附加条縄文を帯状施文する。
2	甕				細砂、長石、赤色スコリア微粒。比較的微密	内外面ともに 淡褐色	單口縁か。口唇上に縄文を施文する。 附加条縄文を帯状施文する (2条交互附加)。
3	甕	[17.0]	[3.1]		同上	外面黒褐色 内面橙褐色	円上 2と同一個体
4	甕				細砂、長石、スコリア 細粒含む。	外面部暗褐色 内面部褐色	複合口縁。輪積痕を残す。口唇上に縄文を施文する。
5	甕				細砂、長石、スコリア 細粒含む。	外面部ともに 暗褐色	口唇上に原体の側面を押圧して、ひだ状にする。器外面は器面調整のみ、内面はハケナダ。
6	甕				細砂、長石、スコリア 細粒含む。	外面部黒褐色 内面部褐色	口唇上をひだ状にし、縄文を施す。 附加条縄文を帯状施文する (2条交叉附加)。
7	甕				細砂、長石、石英、スコリア 細粒含む。	内外面ともに 茶褐色	附加条縄文を施文して施す。 内面はヘラケズリのち部分的にミガキ。
8	甕				細砂、長石、スコリア 細粒含む。	外面暗褐色 内面部褐色	瓶頸に結合縄文を直巣施文したもの、多段化して施す。
9	甕				細砂、長石、赤色スコリア微細粒。微密	内面部褐色	瓶頸の無文部をはさみ、腹部は附加条縄文を施文する (2条並列附加)。内面はハケナダのちヘラナダ。
10	甕				細砂、長石、赤色スコリア 細粒含み、微密	外面部茶褐色 内面部褐色	瓶頸の無文部をはさみ、腹部は附加条縄文を施文する (2条交叉附加)。内面はハラケズリのヘラナダ。
11	甕				細砂、長石、スコリア 細粒含む。	外面部茶褐色 内面部褐色	附加条縄文を施文する (2条交又附加)。下半はヘラケズリのちヘラナダ。内面はハケナダのヘラナダ。
12	甕				細砂、長石、スコリア 細粒含み、微密	外面部茶褐色 内面部褐色	附加条縄文を施文する (2条交又附加)。内面はヘラケズリのちミガキ。
13	甕	[3.4]	[6.4]		細砂、長石、赤色スコリア 細粒含む。	内外面ともに 茶褐色	附加条縄文を施文する (2条交互附加)。 底部外面に木素痕が見られる。
14	甕	[3.3]	[5.6]		細砂、長石、スコリア 細粒含み、微密	外面部黒褐色 内面部褐色	外面はヘラケズリのちヘラナダ。内面はヘラケズリのち部分的にヘラミガキを施す。底部外面に木素痕が見られる。
15	甕	[1.9]	[6.2]		細砂、長石、赤色スコリア 細粒含む。	外面部茶褐色 内面部褐色	附加条縄文を施文する (2条交又附加)。内面はヘラナダ。
16	甕	[2.9]	[6.2]		細砂、長石、石英、スコリア コリア細粒含む。	外面部茶褐色 内面部褐色	ヘラケズリのちヘラナダ。この後附加条縄文を施す。
17	甕	[11.2]	5.5		細砂、長石、石英、スコリア 細粒含む。	内外面ともに 茶褐色	下部にかけて附加条縄文を施す (2条交互附加)。底部付近はヘラケズリのちヘラナダ。内面はヘラケズリのちヘラナダを施す。

## 04D住居跡復元跡生土跡 15ページ

探査番号	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	手 法 上 の 特 徴
第12回 1	甕				細砂、長石、石英、スコリア 細粒含む。	内外面ともに 茶褐色	輪積み痕を残し、口唇上に縄文原体を押圧する。 内面はナダ。
2	甕				細砂、長石、スコリア 細粒含む。	外面部茶褐色 内面部褐色	附加条縄文を施文する (2条交互附加)。 内面は部分的にヘラミガキ。
3	甕				砂、石英粒含み、雲母 細粒少骨含む。	内外面ともに 茶褐色	附加条縄文を施文する (2条交互附加)。
4	甕				細砂、長石、スコリア 細粒含む。	内外面ともに 茶褐色	附加条縄文を施文する (2条並列附加)。
5	甕				2と同様	2と同様	
6	甕		[2.5]	5.9	砂、長石、スコリア 細粒含む。	内外面ともに 茶褐色	外面部はヘラケズリのちヘラナダ。内面はヘラケズリのちヘラナダを施す。

## 02D住居跡 10ページ

探査番号	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	手 法 上 の 特 徴
第8回 1	土器 小型壺	[10.0]	[6.6]		雲母粒、長石粒	内外面ともに 黒灰色	口沿部から体部内外ナダ
2	土器 壺	[14.0]	[3.2]		雲母粒、長石粒	内外面ともに 黑茶褐色	口沿部内外ナダ後外表面にミガキ。内面横幅ヘラミガキ
3	土器 壺	[20.0]	[3.6]		雲母粒、長石粒 石英粒	内外面ともに 淡褐色	口沿部内外ナダ後内面ヘラナダ

押岡番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法上の特徴
第10図 1	土師器 壺	14	5.7	4.7	雲母粒、長石粒	外表面褐色 内面黒灰色	内外面ナデ後外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。内面二次焼成による剥離痕。
2	土師器 壺		[6.1]	3	雲母粒主に長石粒 石英粒	内外表面灰褐色 から暗赤褐色	外表面位ヘラケズリ。内面ナデ。 内面二次焼成による剥離痕。
3	土師器 壺	6	[4.3]		雲母粒、長石粒	内外面ともに 淡褐色黒底	口部内外面ナデ。肩部外面ヘラケズリ。内面二次焼成による剥離痕。
4	土師器 高壺	22.9	[6.7]		雲母粒主に長石粒 石英粒	内外面ともに 淡褐色黒底	外ナデ。 内面横位ヘラミガキ。
5	土師器 高壺		[7.1]		雲母粒主に長石粒 石英粒	内外面ともに 淡褐色	外表面横方向へラミガキ。内面ヘラナデ。上部円形状に寄っている。
6	土師器 高壺		[9.0]	13	雲母粒、長石粒 小石粒	内外面ともに 淡茶褐色	内外面擦痕ナデ。脚部外表面ヘラミガキ。内面ヘラナデ。
7	土師器 高壺		[13.0]	13	雲母粒、長石粒 小石粒	内外面ともに 淡褐色	环部外表面ヘラケズリ。脚部外表面ヘラミガキ。内面ヘラナデ。脚部内面ナデ。环部内面二次焼成による剥離。
8	土師器 高壺		[2.3]	11.2	雲母粒、長石粒	内外面ともに 淡褐色	内外面ナデ。
9	土師器 壺				雲母粒	内外面ともに 淡赤褐色赤彩	外ナデ。内面ヘラナデ。
10	土師器 高壺	20	17.6	16	雲母粒、長石粒	内外面ともに 茶褐色黒底	环部内外面擦痕ナデ。内面下位剥離いへラミガキ。外面中位から下位ヘラナデ。脚部外表面ヘラミガキ。内面ヘラナデ。脚部内面ナデ。脚部下位に焼成度穿孔。
11	土師器 壺	16.8	[5.5]		雲母粒主に、長石粒	外表面淡褐色 から暗褐色	口部内外面擦痕ナデ。脚部外表面ヘラケズリ。内面横位ヘラナデ。
12	土師器 高壺	4.8	3.9	2.6	雲母粒、長石粒	内外面ともに 淡茶褐色	外ナデ。内面壺部ヘラミガキ。
13	軽石 瓶	3.8	横 3.1	重さ 9.8g			左侧面、下側面に擦痕
14	軽石 瓶	2.1	横 1.6	重さ 1.7g			上面、右側面、下側面に擦痕
15	軽石 瓶	6.7	横 4.0	重さ 31.8g			左側面、左下側面に擦痕
16	軽石 瓶	3.8	横 3.6	重さ 11.0g			四角錐形、五面に擦痕
17	軽石 瓶	3.7	横 3.3	重さ 6.3g			左側面、上面に擦痕

押岡番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法上の特徴
第12図 7	土師器 壺	14.6	5.3		雲母多含 小石粒	外表面茶褐色 内面淡茶褐色	口部内外面横ナデ。体部外表面ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。口部端部外表面から内面全体赤彩。焼成前底部外表面に「サ」のヘラキ。内面剥離著しい。
8	土師器 壺	13.4	5.5	3.4	雲母粒、長石粒	内外面ともに 淡褐色	口部内外面横ナデ。体部外表面ヘラケズリ後ナデ。両面赤影。
9	土師器 高壺	17.6	[7.4]		雲母粒、長石粒	内外面ともに 淡褐色	口部内外面ヘラナデ後でいねいなナデ。
10	土師器 高壺	16.3	[5.9]		雲母粒、長石粒	内外面ともに 淡褐色	口部内外面ヘラナデ後でいねいなナデ。
11	土師器 高壺	17.5	[7.0]		雲母粒、長石粒 小石粒	内外面ともに 淡茶褐色	内外面ヘラナデ後ナデ。外面下位凸帯状の接をもつ。
12	土師器 壺		[6.7]	6.2	雲母粒、長石粒 小石粒	外表面茶褐色 内面淡黒灰色	外表面ヘラケズリ後下端横位ヘラケズリ。内面横位ヘラナデ。
13	石製品	石製模造品	有孔円板 (成品)	直径1.4	孔径0.1	重さ1.0g	両面と縁線を研磨する。縁線は研磨が粗い。ほぼ完形。滑石製。
14	石製品	石製模造品	有孔円板 (成品)	直徑2.4	孔径0.1	重さ2.5g	両面と縁線を研磨する。完形。滑石製。
15	石製品	敲錘車		直徑5.6	孔径0.7	重さ17.7g	表面の周縁に刻みによる装飾文。1/2遺存。滑石製。

# 写 真 図 版





01D調査風景（東から）各人が柱穴を掘っている状況



01D遺物出土状況（東から）南東部分の遺物廃棄顯著



01D完掘状況（東から）



01D炉赤色化部分検出状況



02D完掘状況（東から）



03D完掘状況（東から）

図版 2  
04D



04D遺物出土状況（北東から）



04D遺物出土状況 No. 7, No.10部分



04D遺物出土状況 No.12 焼土下から出土



04D炭化材検出状況（北東から）



04D炭化材検出状況（南から）



西壁側中央部①単子葉材・②部材出土状況

住居各辺に垂直方向及びコーナー部では住居中央方向に  
炭化材が検出された。



東コーナー部炭化材出土状況



南壁中央部炭化材出土状況



04D完掘状況（北東から）



04D炉跡完掘状況

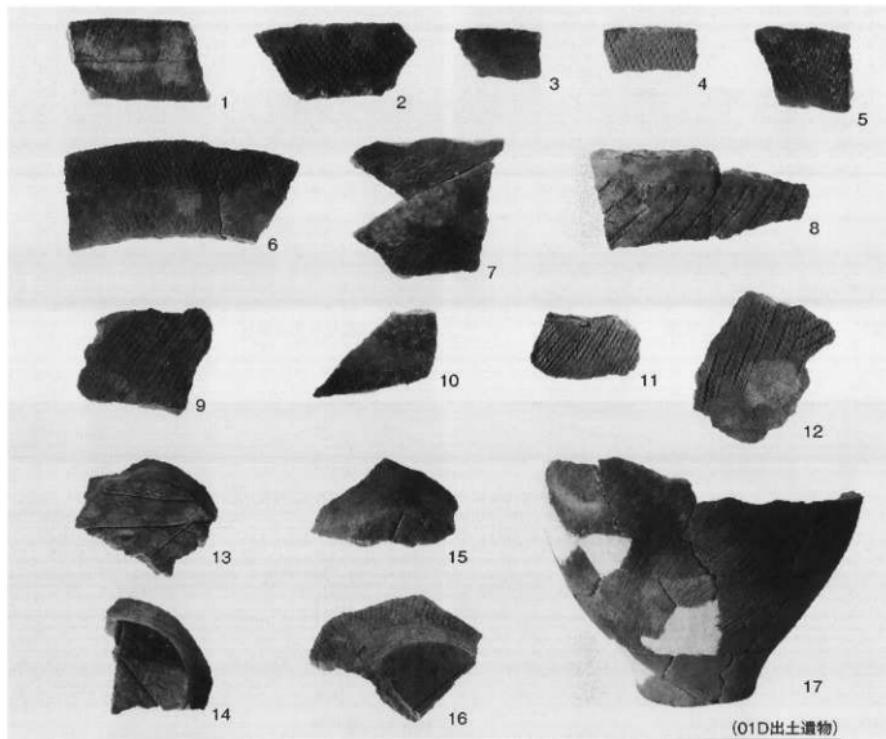


01P完掘状況（南西から）



01P土層堆積状況

圖版 4  
01D・02D・04D 出土遺物



(02D出土遺物)

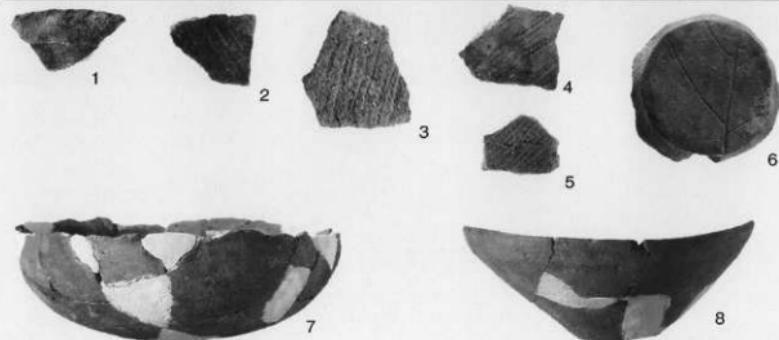


(04D出土遺物)

図版 5  
04D・遺構外出土遺物



(04D出土遺物)



(遺構外出土遺物)

圖版 6  
遺構外出土遺物



9



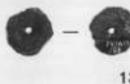
10



11



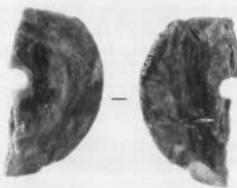
12



13



14



15

## 報告書抄録

ふりがな	しばけんやちよし かわさきやまいせきえぬちてんはっくつちょうさほうこくしょ							
告名	千葉県八千代市 川崎山遺跡 n 地点発掘調査報告書							
福集者名	森 竜哉 中野 修秀							
福集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒 276-0045 千葉県八千代市大和田 138-2 TEL.047 (481) 0304							
発行年月日	西暦 2008 年（平成 20 年） 3 月 30 日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川崎山遺跡 n 地点	八千代市萱田字中台 2288 - 3	12221	241	35 度 44 分 37 秒	140 度 6 分 51 秒	20070606 ～ 20070731	305m <sup>2</sup>	戸建建売 住宅建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川崎山遺跡 n 地点	包蔵地	縄文時代	陥穴	1 基	無
	集落跡	弥生時代	堅穴住居跡	2 軒	弥生時代後期土器片
	集落跡	古墳時代	堅穴住居跡	2 軒	古墳時代中期土器 石製模造品（有孔円板） 石製品（紡錘車） 軽石

要約	戸建建売住宅建設事業に先行して八千代市が受託し、発掘調査を実施した川崎山遺跡 n 地点本調査の発掘調査報告書である。  検出した遺構は縄文時代では陥穴 1 基である。遺物は出土していないが、覆土の組まり具合から判断した。弥生時代では、後期前半から中ばの堅穴住居跡 2 軒で、その内 1 軒は長軸 9 m を超える大型住居跡である。古墳時代では、中期中ばの堅穴住居跡 2 軒で、2 軒共炭化材・焼土が検出された。出土状況から火災住居ではなく、家屋解体時にかかる行為と判断した。遺物は弥生時代では、複合口縁・輪積痕・附加条繩文等の特徴をもつ幾形土器が出土した。後期中ば前後の臼井南式に比定される。古墳時代では、土器類・石製品等が出土している。土器は土師器高杯を中心に基・壇・甕・壺等で器形の特徴やセット関係から中期中ばに位置づけられる。石製魔造品は、隣接調査事例から工房跡の存在が明らかになっており、祭祀にかかる遺物としてその出土状況も含めて考慮すべき点である。
----	---

千葉県八千代市  
川崎山遺跡 n 地点発掘調査報告書  
－宅地開発事業に先行する埋蔵文化財発掘調査－  
2008（平成20年）

印刷日 2008年3月28日  
発行日 2008年3月30日  
発 行 二十一大阪住販株式会社  
編 集 八千代市教育委員会